

弟が教えてくれたこと

五島 美瑠

私の二歳年下の弟は **ADHD** という障がいをもっている。この障がいには、生活に大きな支障は無く、外見からでは分からないため、誤解されやすい性質がある。彼は中学一年生の時、その診断を受けた。

弟はリーダーシップを取り、人を引っ張ることが得意な反面、先生に叱られることばかりする、という面も持ち合わせていた。今まで色々な事件を起こしてきたせい、日が経つにつれ、先生たちは弟が言う言葉を信じなくなっていく。それが目に見えて表れたのは、彼が中学一年生の時に起きたある事件だ。弟が友達と掴み合いの喧嘩をしたのだ。周りで見ていた友達や、喧嘩相手は揃って、一方的に暴力をふるったのは弟だ、という。真相が気になった私は、弟に何があったのかと聞いてみた。弟いわく、必死で怒りを抑えようとしている時に、相手が誰にも聞こえないような声で、「バーカ」と言ったらしいのだ。**ADHD** の特性の一つに、衝動性といって、感情に突き動かされ、考えるより先に行動してしまうというものがある。そのため、怒りを抑えることが、人一倍難しい場合があるのだ。「バーカ」という言葉は、この特性を持ちながらも、「問題を起こしてはいけない。」と必死に耐えていた弟の引き金になってしまった。しかし先生は、弟の話には耳も貸さず、結局、喧嘩相手や相手の親に謝ったのは彼だけだった。

確かに、「弟が暴力を振るった」のは事実だ。障がいがあるからといって、無条件に許せ、とは言わない。ただ、100%弟が悪いと決めつける前に、平等に話を聞いてほしかった、というだけだ。この話を聞いたとき、私は怒りがこみ上げてきて、先生に直談判しようと思ったほどだった。もしも先生が **ADHD** という障がいや、その特性について詳しく知っていれば、もっと丁寧に話を聞いてくれたのではないだろうか。周りの友達が弟の障がいをもう少し理解してくれていればこの事件を違う角度から見て、証言する子がいてくれたらどうかと、色々なことを考えた。またこのあと、事件が学年中に広まったことから、弟の良い面を見てももらえないことが多くなった。私はいつも、それが悔しく、悲しかった。

勉強も、友達付き合いも苦手な弟かもしれない。でも、私たち家族をいつも明るくしてくれるのは弟だ。スポーツも得意で、自分の好きなものに対する知識や熱は、驚くほどすごい。コンビニに寄れば、必ず私の分も買ってきてくれる。そんな、弟の数え切れないほどの長所を、先生や友達にも見てほしかった。私は、これらの出来事を通して二つのことを学んだ。

一つ目は、「知る・伝える努力をすること」の大切さだ。この世の中には、私には想像もつかないようなことがたくさんある。**ADHD** のことだって、弟がその障がいであれば、興味を持ったり、調べたりすることはなかっただろう。**ADHD** について詳しく見て

みると、全国の普通学級で学ぶ小・中学生で、発達障がいの可能性のある生徒は、三〇人学級に二人の割合だという。そして、その割合は年々増加している。たくさんの人たちが、先生や友達が障がいを「知らないから」という理由で苦しんでいるのだ。弟も同じ状況にいたとき、私はいつも、「なんでわかってくれないんだろう」と思うばかりで、周りに、弟の障がいについて伝える勇気も、それだけの知識もなかった。それでも、私たち伝える側が諦め、「知ってもらおう努力」をやめれば、わかり合える日は絶対に来ない、と思う。しかし、ハンデに苦しむ人たちだけが、伝える努力をしても、そこに知る努力が伴わなければ、状況は変化しないだろう。私は、鶴の一声でこの大きな問題を解決するような力は、持ち合わせていない。だからまずは、自分の思いを相手に伝えていくこと、相手を知り、理解する努力を続けることを心がけている。

二つ目は、「人の長所を見ること」の大切さだ。私は、自分が苦手だと思う人の、悪いところばかり見つける癖がある。そうしたところで何も解決しないし、むしろ、誤解や偏見を生み、相手を傷つけることにつながってしまう。しかし、弟の出来事を経験して「相手の良さを知る」ことがどれだけ大切かを実感した。他人の長所を見つけると、それだけでなんだか幸せな気持ちになれる。たった一つ、長所を知るだけで、偏見や差別も少しずつ減っていくはず。そして、こんな小さな意識一つが、障がいを「個性」の一つと捉え、全ての人楽しく生きられる世の実現につながるはずだ、と考えている。

**ADHD** について調べていた際、「学校は、少数の子たちの犠牲の上に成り立っている。」との意見を目にした。そこでは、ハンデに苦しむ子どもたちへ、何の対応も取らないそうだ。本来、子どもたちもその親も、障がいのあるなしに関わらず、正当に教育をうけるため、学校に対して主張する権利がある。しかし、それはつまり、障害のことを公にしなければならぬことを意味する。公表すればいじめられるかもしれない。理解してもらえないかも分からない。こうしたたくさんの葛藤を前に、人として当たり前の権利を主張できない人がいる。

私は、「“自分だけの幸福”もなければ“他人だけの不幸”もない」と思う。普通に生きていればあまり意識することのない感覚だろう。ありがたいことに、弟のお陰で、私はその実感をもつことができた。色々な人の悩みや、世界の問題に関心を持てるようになった。私の視野を大きく広げてくれた彼には、本当に感謝しかない。そして見つけた、キーワード。「知る・伝える努力をし、人の良さに目を向ける」こと。全ての人が行うのは難しくても、私の姿を通して、周りの人にこの小さな行動の重要性を伝えていける自分自身でありたい。